

特別講演 保育者の専門性を生かした保護者支援
～信頼はさりげないメッセージから～



講師 田宮 縁 氏

はじめに

保護者支援は個々の事例に合わせていかに
てはなりません。ここで話すことは、保育者
が普段実践している事が中心になると思います。
自身の実践をふりかえり、省察しながら聞いてい
ただきたいです。

1 保護者支援の基本

傾聴：保護者の話に耳を傾ける



受容：保護者の気持ちを受け止める



共感：保護者の気持ちをとら感じ



支援を考える：保護者がつらく感じている理由や
支援の方法を考える

といった流れが保護者支援の基本となっています。

保育者の専門性としては、

- 1 発達を支援する知識と技術
- 2 生活を支援する知識と技術
- 3 環境構成の知識と技術
- 4 遊びを展開していく知識と技術
- 5 関係構築の知識と技術
- 6 相談・援助の知識と技術

があります。これらは保育所保育指針でも述べられ
ています。実践者として必要なのは、上記の抽象的
な言葉を実際に実感していけることです。私たちは
実際に保護者を目の前にした時、こういったことを
日々の実践の中で行っているのではないでしょ
うか。それを省察していくことが必要であると思いま

す。

2 省察 ～体験から経験へ

私たちはこれまでの経験から、体験をしなれば
わからないことがたくさんあることは知っていま
すし、それが学びになっていくということも知って
います。実は保護者支援についても体験したことが
学びになっていきます。保護者支援は目に見えない
ことです。自分の体験を言葉に変えることや、振り
返ること、省察していくことがスキルアップに繋が
っていくのではないかと思います。ここからは私自
身の体験を省察することで保護者支援について考
えてみたいと思います。

3 一般企業で学んだ人とのかわり～キャリア の省察

私は大学を卒業したあとすぐには教員にならず、
OA 機器のインストラクターとして一般企業に勤
めました。そこで『知ることのすばらしさ』を知り
ます。インストラクターとして学んだのは、一つは
機器に関するスキル（専門性）です。例えば、問い
合わせがあった時にすぐに答えられるようにしま
す。その分野のスペシャリストになるということです。
もう一つは、相手のことを知るということです。
相手のことを徹底的に調べ、相手の立場に立ちなが
ら、相手が必要としていることは何か、相手にとっ
てうれしいことは何かなどを考えながら、仕事をし
ていきます。そうやって人間性を常に磨いて、高み
を目指していくということを学びました。

次の職場で学んだことは、『見て学ぶ』というこ

とです。人のかかわりはとりわけ、マニュアルがあるわけではないので、常に見て学ぶものと勉強しました。うまくいなくても、自分なりに消化して、自分なりにできることをやっていました。

保育者になった時に学んだことは、人に頼ることです。当時は、園児のお母さんの年齢が私よりも上でした。しかも私は新人で、保育のことも十分にできませんでした。その時お母さんたちに、「私は新人なので、教えてくださいませんか?」「今までどんな風にやっていましたか?」等聞きました。相手を選ばなくてはなりません、人に頼ることは決して悪いことではなく、そういった形で保護者に聞いてみることもいいことだと思います。また、自分の思いを自分の言葉で伝えるということも大切だと思います。うれしかったことはうれしかった、楽しかったことは楽しかったと伝えればいいのです。飾らない言葉というのは相手に響くのだらうと感じました。

4 保護者として学んだ保護者支援

連絡ノートは、送迎時の対話、園内の掲示と並んで、子どもの様子を知らせる重要なものです。特に、思いや状況を伝えられない乳児にとっては重要なツールです。保護者は自分の知らない子どもの姿を知ることで、信頼関係が増してくるのではないかと思います。

私の子どもが園の先生から書いていただいた連絡ノートを見てみると、特に飾った言葉ではないですが、入園してから、スキンシップを通して信頼関係につながっていく様子や、子どもの不快感を感じ取って、それに応えてくれる保育者の姿が毎日少しずつ書かれています。保育者自身が嬉しいと感じた子どもの様子も書いてくれてあり、何気ない事でも伝えてくれることが、保護者としてはうれしかったです。

私がトイレトレーニングの進め方を悩んでいた

時に、タイミングよくアドバイスをしてくれたり、園での失敗、成功を知らせてくれたりしながら、経過を知らせてくれることもありました。保育者は、当たり前のこととと思っているかもしれないですが、保護者にとってはとても大切なことですし、すごく嬉しいことです。

連絡ノートはずっと取っておくことができます。保護者にとって宝物であり、後で読み返してみると成長の過程もわかるものです。連絡ノートの記述というものは地道な作業ですが、保護者にとってみれば信頼感を高めていくものであると思います。こういった一つ一つの積み重ねが大切です。

5 実践者として学んだ保護者支援

静大附属幼稚園に勤めてきた経験の中から学んだことをお話しします。広汎性発達障害（自閉症スペクトラム）のK男の母親と同じ方向を向いて支援を行えるようになった事例です。

K男が3歳で入園した頃は、基本的な生活習慣があまり身につけていなかったため、家庭へさまざまなことを協力要請してきました。しかし度重なる協力要請をしても、母親に応じてもらえなかったため、母親との信頼関係を築くことを第一に考えました。それでもなかなか繋がっていきませんでした。

4歳児の秋頃から、5歳児になる手前で何らかのアプローチをしていこうと考え、具体的な支援を行っていくことにしました。特別な支援が必要であるということをまず母親に理解してもらうために、保育参観を活用して、集団での活動時の行動を見てもらって、気づいてもらおうと考えたのです。でも母親は特別な支援が必要なことを感じていないようでした。今はまだ保育者から母親に直接伝える時期ではないと判断し、バランスの良いお弁当とお箸を使う指導についてだけ協力を求めました。

幼児期に不信感だけを持たせてしまうと、そのあとの学校教育でうまくいくことが難しくなります。

幼稚園、保育所は入り口なので、まずは関係をよくしていこうということだけを念頭に置いていました。

K男が自転車に初めて乗れたこと、日頃の行動の範囲が広がってきたことなど、成長した様子を母親に伝えました。またコミュニケーションが今以上にとれるようになると、更に世界が広がっていくのではないかという可能性を伝えました。そして一人一人に合わせて指導をしてくれる、幼児言語教室に通ったらどうかという話をしたのです。すると、保健師さんからも紹介されて幼児言語教室をすでに知っていて、実際には母親もK男に特別な支援が必要なことはよくわかっていました。省察してみると、母親が変わったのは子どもの肯定的なあらわれを伝えたときからでした。その時に初めて母親と同じ方向を向けるということを感じました。

この後もK男はいろいろなことがあったのですが、母親と同じ方向を向いていると、K男も変わってくるし、母親自身もいろいろなことに積極的になってきました。幼児言語教室だけではなく、進路や病院について質問されたり、特別支援学級がある学校がいいのかと言って、実際に一緒に見に行ったりもしました。入学後も母親から、「今学校でこんな感じですか。」「こんなところでK男が大変な思いをしています。」など話しに来てくれました。

6 巡回相談で学んだ保護者支援と保育者の専門性

私は臨床発達心理士の資格も持っていて、静岡市のこども園、保育所、幼稚園などで巡回相談をさせていただいています。この中で学んだ保護者支援もあります。まず聞いていくこと。最初に申し上げた通り、傾聴は非常に重要です。話を聞く中で保護者が自身で結論を出していく姿を見してきました。面接時、保護者の方に「成人した時の子どもさんへの願いは何ですか?」とお聞きすると、自立してほしい

という答えが多く返ってきます。自立するためにはどうしたらよいか考えていきましょと、導いていきます。言葉のことで相談に来る方が多いので、言葉の発達のことも話をしていきますが、乳幼児期の発達は言葉だけでなく、全体として捉えるのがとても大切です。発達段階を保護者にわかりやすく話します。指さしはあったか? 共同注意は? 三項関係は? など初語が出てくるまでの過程をお話しながら、もしかしたらコミュニケーションを取るのが難しいのかもしれないね、というように話を進めていくこともあります。発達の理解は、保育者として知っておきたいし、わかりやすく伝える技術も必要です。保護者の中には、結果を焦っている人が多いです。字を教えるとか、カードを見せるのではなく、言葉は体験を通して覚えていくので、体験を豊かにしていきましょという話もしていきます。でも、保護者ががんばろうとしている気持ちには共感していきたいです。

ブロンフェンブレナーは、子どもを取り巻く環境はそれぞれ違うと言っています。子どもだけでなく、その保護者や、保護者のまわりも観ていく必要があります。現代社会は多様な価値観、家族観があるのではないのでしょうか。

7 専門性を生かした保護者支援

専門性を生かした保護者支援は、最初のとっかかりがあると一気に進んでいくこともありますので、そこをよく判断しながら進めていくといいと思います。

園だよりを有効に活用しましょう。メッセージがきちんと伝わる園だよりがいいと思います。子ども達の様子、自発的に動く子どもの姿、こんな風にお子さんに接するといいですよというアドバイス、当たり前と思われていることの中に、子どもの成長に必要なことや大切だと自覚できることがあること、保護者への労い、モチベーションを高めていける内

容など、園長先生または管理者が普段日常的に考えていることを前面に出すことが大切です。おそらくこれを読んだ保護者が園長先生に対して、また園に対して信頼関係を強めることと思います。

子ども達の生活は、家庭、地域社会、園と連続的に営まれています。その中で生活経験が園でのあそびや生活に反映されてくるし、豊かになってきます。一方で子どもの視点から見ると、保護者と先生が仲良くしていることは、とてもうれしいことです。小さな子どもであっても、人と人の結びつきがどんな風か、関係性をよく見えています。自分の保護者と園の先生が仲良く話していると、安心して過ごせるようになっていくのだと思います。

保護者と保育者の信頼関係は意外とさりげないことから始まるのではないのでしょうか。〇〇ちゃんのお母さんでありながら、一人の人として接してほしいと感じている保護者は少なくないと思います。保護者も、褒めてほしい、気にかけてほしいのです。保育者にとって発達のことなど専門的な知識も必要ではありますが、それと同時に一人の人間として関係を持てる力も要求されるのではないかと思います。難しいケースになればなるほど、専門性と同時に人間性が関わってくるのではないかと思います。目の前の相手の見える部分の良さは、割とお互いにわかりやすいものです。もし、あなたが感じ取ったのであれば、具体的に伝えていけばいいのではないのでしょうか。さりげない一言が、保護者に「あなたのことも大切に思っていますよ。」「あなたのこともしっかり見えていますよ。」というメッセージとなるのです。（保育者の専門性を生かす…）保育はマニュアルがない世界です。相手に合わせながら、専門性を発揮することが大切なのではないでしょうか。

終わりに

私自身、保護者として保育者から頂いた連絡ノ-

トは今でも宝物になっています。そういった大切な部分を先生方は担っているということを思いながら、保育に、また保護者支援に臨んでいただければいいと思います。

保育者資質向上研修会 特別講演
平成 29 年 3 月 4 日
会場：焼津市総合福祉会館 ウェルシップ